

三才児と小動物 (一)

清水エミ子

父母にせがんで、動物園に来る三才未満児は非常に多いようです。しかし、幼児の発案でやって来たにもかかわらず、くさりのついた犬のように、子どもたちは親にひきずられたり、だかれたりして、動物舎の前をす通りするだけです。絵本に出てくるような動物舎の前では「ほら、みてごらん足が四本でしょ」とか、「何てなくの」とか、口やかましく教育されます。そして、くたくたにくたびれ、ぐずりだし、しかられて、泣いてかえるとか、だかれてねこんでしまうといったような状態のようです。たのしいはずの、うれしいはずの、三才未満児の一番よろこぶ動物園での経験が、かなしい、つかれた思い出だけが強くのこってしまうのです。

このような状態を、何年かつづけた夏の動物園で、目のあたりに見、子どもも動物園で毎年行なっている夏季保育のお手つだいを通して強く感じました。そこで、こんなにも子どもたちの好きな動物を

(生きた本ものの動物) どうあたえたらよいかを考え、子どもも動物園の係の方と相談しながら、子どもも動物園の中のモルモットのコーナーを利用して、環境や、動物の種類など、も考えながら、三才までの幼児の小動物に対する実態を調査し指導の可能性や環境の状態、動物の種類などの程度を観察してみました。

そして三才保育がさかんになって来ている現在、保育の場での動物飼育(自然の領域の一端)はどうしたらよいか考えてみたいと思います。

方法

子どもも動物園に来園してくる幼児の中で参加したい幼児だけを写真が示すような環境の中に自由に入れ、その状態を観察した。

指導

個々の幼児の状態をしばらく観察してからじょじょに適当と思わ

れる動物を近づけてみた。

なるべく教師が先に手出しをせず、幼児の行動を助けるという態度でのぞんだ。

動物

モルモット 十匹、うさぎ(小さいもの)三匹、ハト(とびばねを切ったもの)三羽、カメ 五匹 中位の大きさのもの。

用具えさ

かなだらち、テーブル、えさ入れ、えさ、なっば、ニンジンを用いた。

次に具体例をお知らせしましょう。

指導者

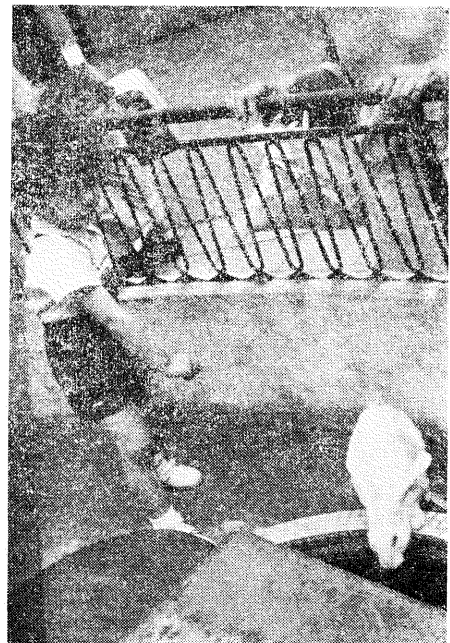
幼稚園教師 三名、助手 二名。

① 二才九か月、妹と両親の四人家族

飼育動物は何もなく、隣家のねこをかわいがってさわりたがるが、ひとりではさわれない。動物園は大好きでくることをせがむ。

コーナーに入って、フラフラ歩きながら他の子どもたちの動物をいじったり見たりしているのをながめ、大きな目を見開き、「オー」と歓声をあげ、喜びで体をこわばらせ手をふりながらカナダライをのぞいていた。

② カナダライの中のモルモットや、カメをこしを下してながめ、「アー、アー!こんなになった、目があるよ、みてる、みてる」と



一分間もの長い間じっと動かずにながめていた。

③ 教師をひっぱって、モルモット舎の中のモルモットをながめにいき、顔中くしゃくしゃにしてよろこび、「あかもしろも、いっぱいあるいてる。ないた」と指さしていた。

④ 教師がカナダライの中に入ると、目を大きく開いてながめていたが、うさぎがカナダライからにげてしまうと、それを「アハアハ」と声を立てておいかけた。そして、池の水をのむうさぎをみて、「アラ」とびくりして立ちどまり、右手に力をいれてながめていた。三才児の感情表現の特徴のようだ。

⑤ 水をのんでいるうさぎの背中をさわろうと手を出すが、なかな

かきわれない。

体全体が、緊張してかたくなっている。

⑥ ついに、うさぎの背中を、自分からさわった。五本の指先全部をつかって、そっと三回なで、さくごしに見ていたおとなに思わず笑いかけた。

⑦ この経験に自信がついたのか、自分の体の半分もある、ロップうさぎをおいかけていく。この時、両手くびをしじゅうくるくるうごかし、いつでもつかまえられるようにかまえているようだった。

「ほら大きいでしょ、おにいちゃんうさぎ」といいながら近づいた。

となりのねこを長い間かかっても自分からさわるということのできなかった子が、たった一回、うさぎの背中をそっと指先でなでられた経験がこんなにも子どもを積極的に変化させるのだな、と感じ積極的な経験の大切さを知らされた。

⑧ うさぎのしっぽの動くのにふしぎをかんじ、さわろうとするのだが、さわれない。「しっぽうごいて」「しっぽうごいて」といいながら、うさぎをおっていた。

⑨ また、カナダライのモルモットにかえってきた。こんどは前とはちがいの、のぞいたと同時に、両手でモルモットをさわろうという体せいをとった。そしてとなりに見ていた一才未満児に、「これ、しろあげる」と話しかけている。これを見ていた父親は「おどろいた。人に声をかけられても話さない子なのに、自分から話しかけて

いる。知らない子なのに」とびっくりしていた。

このように動物は子どもを開放し、親や兄弟にもみせなかった内面を表に引き出す役わりをしてくれる。

⑩ 近くの教師に、「これ好き」とみけのモルモットのおなかを片手の、手のひら一ぱいでつかみ、話しかけている。

(この時、コーナーに入ってから十三分)

⑪ 自分のこのみに合ったモルモットをとなりの仲間を取ってあげようと、全力をふるってモルモットをよんでいる。そしてこの時、



耳を見つけた。「みみある、きこえるね、ここにみみがある」と大よろこびをした。

自分でさわり、自分で発見していったこと、これこそ、子どもたちの体の中にしみこんでいくのではないだろうか。

⑫ 小さい仲間に、カメラを取ってと言われて手を出したが、前向きにあるいてくるカメラは何だか気持ちがある。ゆうきを出そうと一生懸命、片手をモモのせ、力をいれ、片手を近づけるが、つかまえない。そのしんけんな顔は、さくの外のおとなもいきをのむほどだった。

⑬ にげられてしまったカメラをうしろからおつていく。目はカメラからぜったいにはなれない。

動物の顔の方を前向きにして子どもにあたえると、こわがる子が多いのだが、うしろから、そっとさわらせると自然になじんでいく子が多いようだ。

⑭ うさぎより、カメラは何となくみ悪さを感じて手を出しては「こい、こっちこい」と言っているがつかめない。

(コーナーに入って 十八分後)

⑮ カメラをあきらめた男児はモルモットをつかまえ、カナダライから一匹ずつ床に出しはじめた。「あるきなさい、ほらあるきなさい」と出していった。

今までの体じゅうの緊張がとけてゆっくりとした体つきでモルモット



トのおなかを両手でつかんでいる。(二十分後)

⑯ きにいったモルモットが上段の床から下段におりると、「だめですよ、だめですよ」といいながら、仲間のモルモットの所につれていった。自由な、らかな手つきでもっている。

①⑦ 毛色のちがうモルモット二匹を上段にはなし向きあわせにおき「さ、おはなししましょ、ほら、なかよくよ、あそびましょってさ」などと話しながら、動物と親しみ仲間としてあそべるようになった。

自分で進んで親しみ経験していくと、短時間に安定してその物と仲間になることができる。

①⑧ 「これ、おうちにつれていきましょ」と茶色のモルモットを父親の所に持ってゆき、「かってねこれ」といつていた。

①⑨ 父親が「もうおそくなるからかえりましょ」と声をかけたが「まだ」といつて、コーナーの中央にもどつて、足もとにいたうさぎ



ぎをだき、「ほらいやいやってよ」と父親にみせにいつた。

それから、しばらくあそび、三十二分後にコーナーからでたのである。

この子たちは、動物は好きだが、自分の手ではどうしてもさわれない子たちである。

こんな子にはけっしてむりはきんもつである。ちよくせつ手にふれないよう何か間接的にさわれるよう考えてあたえ、さわりたくなくなる時をまつべきだと思ふ。

②⑩ コーナーにはよろこんで入り、友だちが動物をさわるのをよろこんでみているが、自分では全くさわれない。

②⑪ 教師に、ポーションの中にモルモットを入れてもらつて、おそるおそるながめている。七分間もじつとみていた。

②⑫ 一本の指で、そつとモルモットの背中をさわってみるようになった。(十二分後)

②⑬ さわれないため、自分のようふくの中にモルモットを入れてもらい、だいている。「うごくよ、あつたかい」などいいながら、いざりながら、八分間もかかえていた。

このような経験をじゅうぶんにさせてからさわらせないと、せつかくの好きという感情もなくなり、こわがらせ動物ぎらいの子にしてしまふきけんのある子たちである。